

特集 地域社会の経済発展

若者の自立促す 支援のカタチ

貧困の連鎖を断ち切るためにできること

地域社会の経済発展において、若者は貴重な存在。しかし、保護者や行政などから適切な養育が受けられず、貧困に陥る若者がいます。児童養護施設を退所と同時に、社会に放り出されることになる若者に必要な支援を提供し、自立を手助けすることは、まさに、地域社会の経済発展にとっても重要なことです。そうした若者たちが経済的、社会的に自立できる道を切り開いていくために、ロータリーには何ができるでしょうか。



児童養護施設を卒業した若者当事者
上：田中れいかさん（大宮東RAC）
左：ブローハン聡さん

「機会と縁」で「もったいない」を減らす

NPO法人フェアスタートサポート代表理事 永岡 鉄平

少子化の影響もあり、2023年3月末、高卒新卒者の有効求人倍率が過去最高の3.49倍を記録。多くの企業で人手不足がますます深刻化しています。それにもかかわらず、2人に1人の割合で貧困状態に陥っている若者たちが存在します。児童養護施設の出身者です。

なぜ施設出身者たちの多くが、このような状況で、若くしてワーキングプアになりやすいのか。その要因は「キャリア教育の機会」と「ロールモデルとの縁」に恵まれていないこと。就職はできても早期に離職してしまい、フリーターの状態が長引いてしまうことにあると考えています。

ワーキングプアに陥る若者の実態

現在、日本には児童養護施設が約600カ所あり、約2万5,000人が暮らしていますが、日本全体の要保護児童数は約4万5,000人を超えともいわれています。施設に入る子どもの背景は、昔は親の死亡や行方不明が多かったのですが、今は虐待による保護が圧倒的に増えてきており、全体の約半数を占めています。

児童養護施設の子どもの多くは、18歳になり、高校を卒業すると施設を出ることになります。2024年4月より年齢による一律の利用制限は緩和されますが、その後は就職進学にかかわらず、自立が求められます。虐待が背景にある場合、実の親を金銭面や精神面で頼れるとは言い難く、多くの子どもが退所後、自立すること



児童養護施設入所者の就職相談に乗る永岡氏（中央）

になります。

施設の高校生たちは卒業後、約4割が進学します。ここ数年で、給付型の奨学金を受けやすくなったため、以前のように進学するなら借金をしなければならない、という状況は緩和されつつあります。ただ、学費などは賄えても、日々の生活費は自分で働いて得なければならないなど、進学しても、学業とアルバイトの両立に耐えられないなどの理由で、進学者の約2割が中退していきます。

就職者に関しても、高校卒業時までにやりたいことが見つからなかった若者たちは、仕事の内容よりも、住み込みで働ける会社、といった条件優先で就職活動を行う場合が多く、入社後に仕事にやりがいを感じられないなどのミスマッチに発展し、早期離職に至りやすくなります。

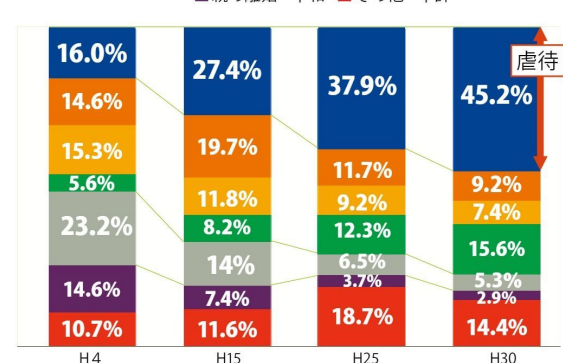
中退や早期離職が起きてしまうと以降、正社員としての就職の難易度が上がり、結果的に多くの施設出身者が非正規雇用の、不安定な収入生活に陥ることになります。

全国の児童相談所における児童虐待に関する相談件数



出典：「社会的養育の推進に向けて」令和5年4月より
こども家庭庁支援局家庭福祉課

児童の措置理由（養護問題発生理由）

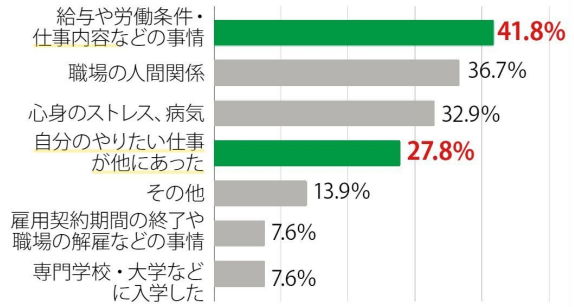


令和3年度末に高校を卒業した生徒の
進学・就職後の状況



退所者の1年以内離職率 約43% (全国平均約16%)
退所者の進学先中退率 約20% (全国平均約2%)

児童養護施設退所者が
転職した理由



※「社会的養育の推進に向けて」令和5年4月 こども家庭庁支援局家庭福祉課、厚生労働省「新規卒者の離職状況」令和4年10月、東京都福祉保健局「東京都における児童養護施設等退所者の実態調査報告書」令和4年1月より作成

いわゆる「ワーキングプア」です。東京都が昨年発表した都内の児童養護施設などの退所者への月収調査では、約5割が月収15万円未満であることが判明しました。最低賃金が日本で一番高い自治体でこの数字です。やはり、安定した雇用形態で働けないと、厳しい収入状況になってしまうことがよく分かります。

現況を、当団体では「かわいそう」と感じるだけではなく、少子化、労働人口減少の日本社会においては「もったいないことになっている」と考えています。この課題を解決すべく、これまで約10年、この若者たちへの就労支援を行い、大事なポイントが少しずつ見えてきました。

キーワードは「未然予防」と「自己決定」

大事なのは「未然予防」です。高校3年生の進路選択の時に、将来自分はこういった仕事をしてみたい、こんな社会人になりたい、こうした「目標」を持てた状態で進学や就職ができれば、未来が描けているので、早期にドロップアウトすることなく、力強い歩みを実現しやすいと考えています。また「自己決定」というキーワードも大きな鍵です。誰かに決められた、促されるだけの人生ではなく、自分がどのようなキャリアを築いて生きていきたいのかを自分自身で決めていくことが肝要。たとえつらいことがあっても「自分で決めた人生だから」、そう思えば、それが支えになるはず。

そのために必要なのが、企業のサポート。中高生時代に、地域のさまざまな企業と関わりを持ち、仕事の見学や体験ができること、見学や体験を通じて各社の経営者や社員から励まされること、社会人として大切な価値観を吸収できること。企業側がこうした機会をしっかりと提供することで、大人になった本人たちの社会参画の精度が高まると考えています。親が無職や生活保護受給者といった環境で育ってきた子も少なくありません。社会人のロールモデルに多く触れることも必要なのです。

「未然予防」と「自己決定」を意識しながら、施設の中高校生たちへ多種多様な企業見学や体験を可能とする機会を提供してきた結果、そこでお世話になった会社に就職したいという高校生たちが出てきました。そして、このようなご縁の中で就職が実現した場合、1年以内離職率は約20%。これは東京都が調査した施設出身者の1年内平均離職率(約43%)に比べ、とても良いスコアとなっています。離職率が高い要因は若者本人だけにあるのではなく、就職活動における健全な環境を、今の日本社会が提供し切れていないことが大きな理由であることを、当団体としては実証し始めています。

負のスパイラルから抜け出すために

私たちNPO法人フェアスタートサポートは、各地の児童養護施設と企業とが就労支援で連携していくこと、その促進とコーディネートにも力を入れる団体です。現場で活動している立場から考えるに、施設の子どもたちは「人と環境に恵まれてほしい」のです。それがしっかり担保されれば、いわゆる貧困の連鎖と呼ばれる、負のスパイラルから抜け出しやすくなると思うのです。私たちにとって、マッチング先としては人を「使おう」と考えている企業ではなく、「育もう」と考える企業がベスト。社会奉仕への思いが強く、職業倫理を重んじる実業人、専門職業人の集まりであるロータリーの会員企業は、親和性が高いと考えています。各地の企業が、自分たちの地域の子どもたちの支援に貢献していくことは、とてもすてきなことではないでしょうか。こうした動きが日本全体に浸透していくことを願っています。

NPO法人フェアスタートサポート:

どんな環境で育っても、全ての若者たちが自分らしく「はたらく」を実現できる社会を目指し、児童養護施設出身者など社会的養育が必要な若者たちへの教育・就労支援を行っています。

fair-start.co.jp/



STEP2 知る Hearing

頼る大人もいないまま一人で社会に出ていかなければならない児童養護施設を卒業した若者たち。当事者の生の声に耳を傾けましょう。



ブローハン聡: 1992 年生まれ、東京都出身。フィリピンとスペイン、日本にルーツを持つ。(一社) コンパスナビ事務局長として児童養護施設出身者の就労や生活を支援。小学生～高校生向けに『支える、支えられる、支え合う』(岩波書店 2022 年 10 月発行) を出版するなど、児童養護施設出身当事者として講演や動画配信を行っている。

誰もがいつだってREスタートできる

(一社) コンパスナビ事務局長 ブローハン聡

私は、児童養護施設出身者です。被虐待児であり、無国籍、無戸籍だった自身の経験を通して、日本で現実に起こっている課題を伝える活動をしています。

ライターでお尻をあぶられた子ども時代

日本で生まれた私は、普通とは違った形で幼少期を過ごしました。既婚者だった実の父親は、フィリピン人の母親から生まれた私を認知しませんでした。無国籍、無戸籍のまま、11 歳で児童養護施設に保護されるまで、義父からあらゆる虐待で命を脅かされ、死を覚悟するような日々を過ごしていました。ライターで耳やお尻をあぶられ、やけどの痛みでうまく座れずにいた私の様子に違和感を持った担任の先生が虐待を発見。保護されてから約 20 年がたった現在、私は 31 歳になりました。あの時、いつものように先生に見つからないよう、虐待のことを隠していたら、今日この瞬間、生きていなかった

かもしれません。さらに 14 歳の時、この世で唯一愛していた存在である母が旅立つと、虐待を痛みと感じないよう、何をされても自分を俯瞰することでようやく保っていた自分の心が壊れるのが分かりました。

まだやり直せる、まだ明日に希望が持てるはず

そんな時、ふとテレビに映し出された 1 枚の写真「ハゲワシと少女」を見て衝撃が走りました。地球の反対側で戦争で苦しんでいる子どもがいる。今の私は食べる物も寝る場所も、勉強できる環境もあり、明日を生きたいように生きられるのに、一方で明日に希望が持てない子どもがいる。私はまだやり直せる、まだ明日に希望が持てる。生きよう、と決心しました。そして人は、何度でも出会いやきっかけ一つで変わり得る可能性がある、と知りました。今までどれだけの人が関わって、私の命をつないでくれたのだろう。自分が置かれている全ての環

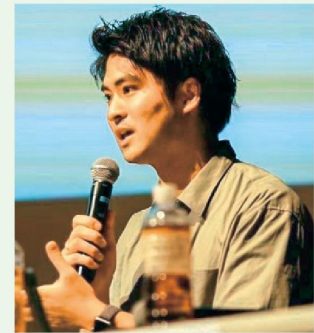
境に感謝しました。私はあの実父と義父にも「ありがとう」と言いたいし、天国にいる母に「生んでくれてありがとう、お母さんの子で良かったよ」って誇りをもって報告できるように生きようと思っています。こうしてロータリアンの皆さんに、社会的養護が必要な若者のメッセージを私が代弁して届けられることにも、とても感謝しています。

今は私が支援する側に

現在、私は主に二つの活動をしています。一つは社会的養護を離れた若者たち（ケアリーバー）の支援。もう一つは、社会的養護を必要とした当事者として、認知度向上や啓発のための発信を行うこと。具体的な支援活動としては、（一社）コンパスナビの事務局長として、埼玉県を中心にケアリーバーの若者へ、就労支援、住居支援、巣立ち（独り立ち）の支援を行っています。特に力を入れているのが住居の支援で、埼玉県主導で「児童養護施設退所者等アフターケア事業（クローバーハウス）」を、コンパスナビが受託、運営しています。ここでは、児童養護施設を退所し社会に出ても、同じような背景を持った若者たちが気軽に集い、若者の心のよりどころとなることを目指しています。

もう一つ、当事者としての発信活動は、You Tube による番組配信と講演活動です。私の周りには、家庭内で性的虐待を受け続けた子、虐待されていることを学校や警察に伝えても助けられなかった子など、さまざまな人が集うのですが、家からかばん一つで、所持金もなく飛び出してきたところから私たちはつながります。緊急処置としてその日の寝る場所を探すことから始まり、

食事や生活を整え、働く場所を探すこともあります。同じような境遇の若者たちや、まだ施設にいる子、苦しみの中にいる若者や子どもたちに、希望を込めて情報発信をするのと同時に、大人たちにも社会的養護に関心を持ってもらうことで、



社会的養護が必要な若者への支援を呼びかけるブローハンさん

この問題について考えてもらえるよう、さらにはアクションにつながるよう願っています。

想像できますか？ 心身が傷ついた若者が一人で社会で歩いていくこと。子ども時代に「子ども」としての時間を奪われ、心身が傷ついた若者が、社会人として一人で生活することは容易なことではありません。明日を生きることを選ばない若者もいます。一方で、傷を抱えながらも、強く生きようとする子もいます。日々、さまざまなことで葛藤を抱え、一つ一つの出来事に揺れ動きながら少しずつ前に進んでいく姿を見守り続けます。

同じ日本に生きているのに、社会のしわ寄せが若者や子どもなど弱い者たちに向かっている課題を、どうにかしなければなりません。貧困をはじめ若者のさまざまな課題を、「自己責任」の一言で片付けるのは悲し過ぎます。ロータリークラブの皆さんには生きづらさを抱える若者たちに思いをさせ、関心を持っていただきたいです。願わくは近くにいる大人を通じ、一人でも多くの子どもの若者の命が繋がれていくことを祈っています。

児童養護施設出身者による YouTube 情報発信番組 THE THREE FLAGS (スリーフラッグス) のろしー 希望の狼煙ー



ブローハンさん含め児童養護施設出身の3人の視点から社会を考え、新しい未来をつくるための“声”を発信する情報番組。チャンネル登録者数は約9,300人。

three-flags-kibou-noroshi.jimdosite.com



自身の体験を記した著書『虐待の子だった僕』（さくら舎 2021年10月発行）を手にするブローハンさん

（一社）コンパスナビ：埼玉県より「児童養護施設退所者等アフターケア事業」を受託し、児童養護施設や里親さんなどのもとを巣立った若者への就労支援、住居支援、また施設などに入所中の子どもたちの自立支援を行っている。

compass-navi.or.jp



「かわいそう」はもう違う！

大宮東RAC 2022 - 23 年度会長 田中れいか

私は7～18歳までの11年間の児童養護施設で過ごしました。施設出身者として「もっと自分の経験を他の多くの施設の子たちに話したい」と知人に伝えたところ、ある児童養護施設での講演会をセッティングしてくれました。その主催者が大宮東ローターアクトクラブ（RAC）でした。子どもたちと話しているうちに、私も施設にいた時に、ロータークラブの皆さんとバーベキューと一緒に楽しんだことを思い出しました。これもローターとの縁と感じ、大宮東RACに入会、現在5年目です。

せっかくローターアクトクラブに入会したからには、自分の経験を奉仕活動に生かしたいと思っています。いるのですが、活動の中心だった会員が卒会（クラブ退会）した上にコロナ禍となり、私がクラブ会長を務めた昨年度は、クラブの会員基盤をゼロから立て直す段階にありました。会員増強やSNSの体制を整え直し、また児童養護施設の訪問など継続事業をこなすことで精いっぱい、ローターアクトとして、社会的養護が必要な若者たちへの支援は今、できていない状況です。

ロータリアンの奉仕活動の懸け橋になりたい

ロータリーの会員は、世の中の支援が必要な人に手を差し伸べています。ニーズはたくさんありますが、私の経験からいうと、児童養護施設を退所した若者にも支援の「機会」があると思ってください。退所時にスーツや靴を送ってくださるクラブもあります。ロータリーの人が思っている以上に、うれしいものなのです。しかしその後、独りで生活していく中で襲ってくる孤独感、常識的な金銭管理ができない、人間関係でのつまずき……。そんな不安を和らげてくれる大人が身近にいたら、と思うことがあります。しかし施設を出て、いきなりロータリーの会員に頼っていい、相談していい、と言われても、知らない人にいきなり相談できる子はいません。時間はかかりますが、長い目を持ってほしいのです。施設にいる間に信頼関係を築けるようになれば、特にロータリアンだからできることとして、できるだけ早い段階で、さまざまな職業との出会いの機会を与えていただけたらと思います。

実は退所後、20歳ぐらいまでは、大体みんな集団生活のストレスみたいなものから解放されたい気持ちになります。私は、退所からしばらくして、自分の仕事もちょっと落ち着いて何かしたいなと思った時、ローター



児童養護施設の子供たちに自身の経験を話す田中れいかさん（中央）

アクトクラブと出合いました。ローターアクトとして、機会を得て今後、ロータリーの会員の皆さんが、施設への支援の輪を広める懸け橋になりたいです。11月、児童虐待防止に取り組んでいる団体を支援するイベント、「ORANGE WALK」が開かれます。これは歩くことで児童虐待防止に取り組む団体への寄付になる取り組みです。よろしければ、ロータリーの皆さんもご協力をお願いします。

今、私はNPO法人「プラネットカナル」で、施設出身者の自立のための家具や生活用品、住居などを支援する広報活動をしています。また、施設出身者の情報を発信・支援する、（一社）「たすけあい」を設立し、「社会的養護」への認知を普及する活動を行っています。ロータリアンの皆さんには、一人でも多くの人に「社会的養護」について知っていただき、若者の自立支援を継続的に応援していただきたいと思います。

（第2770地区 埼玉県）聞き手：友編集部

田中れいか：1995年生まれ。親の離婚をきっかけに、7～18歳までの11年間、東京都世田谷区にある児童養護施設で暮らす。退所後、短期大学に進学し保育士資格を取得。その後、モデルの道に。ミスユニバース2018茨城県大会準グランプリ・特別賞受賞。2020年4月社会的養護専門情報サイト「たすけあい」を創設。YouTube人気動画は16万回再生を突破。著書に『児童養護施設という私のおうち』（旬報社）がある。詳しくはInstagram: tanaka_reika または公式サイト tanakareika.jimdoofree.com へ→



STEP3 活動
Acting

社会的養護が必要な若者たちをクラブとして、企業として支援するロータリー会員。私たちにできることを考えてみましょう。

私たちは地域の大人。子どもの自分発見をお手伝い

大津中央RC 浜本 博志

当クラブは2020 - 21年度、当時の野口真理子会長が所属するNPO法人「くさつ未来プロジェクト」を通じ、認定NPO法人「キーパーソン21」のキャリア教育プログラム「夢！自分！発見プログラム」を知りました。

このプログラムは、先生でも親でもない第三の大人と向き合い交流する中で、子どもたちが将来の仕事や生き方を考え、本当に大切にしたいことに気づき、行動していく力を育む、というもの。もっと地域の子どもたちと本気で向き合える事業をしたいと考えていた私たちは、このプログラムに参加することにしました。

試みたのは「すぎなものビンゴ&お仕事マップ」。子どもが大人に交じって話し合うことで自分を知り、自分と世の中のつながりに気づき、自身と他者の違いを認め、自分から動き出さずにはられない、自分だけの原動力を発見し、それぞれが未来のことを考えるためのプログラムです。

「地域の大人」としてまずはトレーニング

この実施前、まずは私たちが研修で、子どもたちへの関わり方や、声かけのスキル、言葉の引き出し方法などを学びました。研修を受けることで、私たち大人がまず変わり、子どもたちに向き合える準備をします。この研修を受講したのをきっかけに、当初は子どもたちに関わるだけでいっぱいだった会員が今や進行役を務めるなど、新たなスキルを獲得しています。

20 - 21年度は当クラブ主体で、市内の小中学校、および児童養護施設の子どもたちにこのプログラムを実施。「自分のやりたいことや好きなものが分かった。人と話すことで自他共に理解が深まった。もっといろいろな人と話してみたい」「自分が将来何をしたいのか、自分でも意外な一面を知ることができた。楽しかった」な



「地域の大人」として、子どもたちの言葉を引き出し、将来の仕事や生き方を考えてもらうロータリー会員



ど、参加した子どもたちから多くの感想を得ました。どんな環境にある子どもたちも、それぞれが未来に希望をもって輝けるような地域をつくりたい、という私たちの願いがかなった瞬間でした。

地域の子どもの未来を共に夢見る

当時養成講座を受講してサポーターとなった会員たちは、この事業をきっかけに地元で開催されるプログラムに個人としても参加を続けています。22 - 23年度は、県内五つの児童養護施設の子どもたち向けの、滋賀県社会福祉協議会主催のプログラムなどに参加しました。

また、このプログラムで見つけた、子どもたちそれぞれの「やりたい！」に寄り添うプロジェクトも実施。「大工さんになりたい女の子」がいれば、ロータリアンのついでで女性大工の話を一緒に聞きにいった、実際の仕事を体験してもらいました。

さまざまな職業人の集まりであるロータリークラブ会員が直接、子どもたちと向き合うからこそ、プログラムを効果的に活用できます。その結果、地域の子どもたちの未来を共に夢見ることができます。

全国のクラブでできることです。それぞれの地域に根差したロータリークラブの強みを生かして、子どもたちを育み、地域の活性化につなげていきましょう。

(第2650地区 滋賀県)

認定NPO法人キーパーソン21:子ども一人一人が個性や多様性を認め合い、自信を持って自分らしく生きる力を育むため、地域の大人が参加して、全力で子どもたちの成長を支える活動を実施。



www.keyperson21.org

全ての若者に多様な雇用の選択肢を

(株)三好商会代表取締役会長
水品 正博(横浜RC)

弊社はバブル後の建設不況の中、新規採用を控えていた時期が長く続いた結果、年齢構成比がいびつになり中長期的な人事戦略を立てにくくなっていました。そのような状況で定期的な新卒採用を再び始めたものの採用実績が途切れてしまっていたこともあり苦勞していたところ、NPO法人フェアスタートの永岡氏と出会い、児童養護施設学生に対する会社見学やインターンシップ受入れなどの協力をしてまいりました。以降、新規卒業者採用の一環として現在までに2人が入社してくれました。

身近に相談できる相手がいない可能性もあるので最初は心配していましたが、採用後初期の段階で永岡氏が声かけをしてくださったおかげもあり、他の社員と変わり

なく働いてくれています。彼らには施設卒業と同時に一人暮らしを強いられるという事情があり、その時に借りる部屋の保証人に苦勞すると聞いていたので会社名義で借り上げ、本人からは家賃の一部を徴収するという形をとっています。

施設卒業者に限った話ではありませんが、10代で就職する若者たちは限られた期間・狭い世界観の中で就職先を選ばなければなりません。多様な仕事で彼らの選択肢になり少しでも就職のミスマッチを減らせるようにしていくことが、その後の安定した人生につながるのではないのでしょうか。

(水品 洋一・記/第2590地区 神奈川県)

ロータリアンの人情が支えに

(株)栗原建設工業常務取締役 金子 茂久

私が児童養護施設を退所したのは、今から40年前の中学3年生の秋。理由は進学する高校が学区外だったためです。幸いにも進学先の高校の先生の家に下宿でき、施設の後援会から多少支援も頂き、高校を卒業することができました。

卒業後、都内の企業に就職しましたが、入社3年目に景気が悪くなり自主退社。都内では家賃が高かったため埼玉県越谷市に引っ越して、求人広告で見つけた会社の上司がロータリアンの栗原さんでした。当時の栗原さんは越谷市に住んでおり、「私の車の運転手をしてくれ」と言われ、会社まで一緒に通勤していました。今思えば、私の通勤費を浮かせるための優しさだったように思います。給料日前にはいつも「飯を食いにくぞ」と、しょっちゅうごちそうになっていたのも懐かしい思い出です。数年後、「実は実家が建設業を営んでいる。そろそろ家業を手伝わないといけな。おまえも一緒に来るか」と誘っていただき、栗原建設工業に入社しました。

今の会社の良いところは、アットホームなところ。入社当時は朝ごはんを栗原さんの家で頂き、弁当も作ってもらいました。結婚式を挙げる時、家族のいない私の親として、栗原さんの両親に出席してもらいました。栗原さん自身は「兄」として結婚式にてご挨拶してくれました。今、私は2人の子どもに恵まれ、家建て、子どもは公務員として働いています。会社では役員として働いています。

私は人生の節目にたまたま支援をしてくれる人がいて、そのおかげでここまで来られました。当時、同じ施設にいた人たちはきっと大変な苦勞があったと思います。現に、当時の他の仲間の動向は分かりません。本人が努力すれば道は開ける、というのは施設卒業者のほんの一握り。15～16歳で就職か進学かを決めるのは酷でした。進学を希望しても、学力よりもお金が必要で、奨学金があるか、授業料免除があるか、それを考慮してくれる近くの公立高校への進学が精いっぱいでした。

児童養護施設を卒業した若者への支援として、寮や社宅を完備した企業が増えたら良いな、と思います。本人たちが成人するまでの期間に、ある程度の蓄えができる環境づくりを望みます。

栗原グループ代表
栗原 偉憲(杉戸RC)

たまたま部下が養護施設出身者だったただけでした。一般的な社員と同じ対応をしてきました。ただ、仕事に対して彼は比較的貪欲だと思います。社会的養護が必要な若者や子どもたちにロータリーがまずできることは、声をかけることです。近所にも親が不在がちな家があるので、なるべく訪問し、その子とごはんを一緒に食べたりして、とにかく寂しくさせないように、声がけしています。(第2770地区 埼玉県)

